



動物園という文化を考えてみた

小松 守

(秋田市大森山動物園 園長)

コロナ禍で当たり前にあった人の動きや交流は制限され、暮らしや経済などへの打撃が続き、社会や人の心に閉塞感が広がる。4月の緊急事態宣言で大森山動物園もGW前後に休園を余儀なくされたが、その後の秋田はコロナ発生も比較的少なく、今シーズンも動物園にはたくさんの笑顔があふれていた。動物園はコロナ禍の中、癒しの場の一つになっていたようにも思える。

現代人の暮らしは自然との距離が遠くなり、野生との関わりも希薄化しがちだ。人は時に動物園に出かけ、様々な動物との出会いで自然や野生に思いを広げながら、自身の動物性や人間性に気づいたりして新鮮な気持ちになる。動物や自然を感じ、知り、相手を思い、安らぐ。人はそんな感覚の総和で動物園を楽しむのだろう。世界各地の動物園を歩いてみてわかったことがある。動物園は言葉や暮らし、文化や思想の違いを超え、人は皆、笑顔になり、楽しそうに動物と向き合う。

最近、ある全国紙が日本の動物園のあり方を問う特集を組んだ。動物園に関わる者として様々な考えさせられた。動物園は動物理解を活動の中心にしてきたが、動物園理解をどこまで社会に向け発信してきたのか。動物園はどんな存在なのか、動物園文化を改めて考えてみた。

日本人は動物好きだ。江戸時代、異国からやってきた動物の見世物小屋が立つと大いに賑わったらしい。島国、鎖国、仏教思想、米と魚の食

文化など様々な事情のせい日本には動物園文化が誕生しなかった。

日本に初めて動物園が登場したのは明治になってからだ。明治政府は西洋文化への追随策の一環として博物館文化を取り入れた。その一分野に動物園があった。博物館分野の動物園は成熟しないままその領域から離され、離れた。位置づけがどこか曖昧だったが、利用者の多さもあり、動物園はしだいに全国へと広がりを見せた。日本的な展開とも言えそうだ。

動物園をさらに知るため、動物園文化発祥の地ヨーロッパにその源流を辿ってみた。それは動物園文化が日本に発生しなかった理由を考えることにもなる。

動物園は言うまでもなく歴史の中に突如登場したものではない。人と動物の関係の歴史、動物の取扱い技術や知識の蓄積などの基盤の上に、様々な文化、宗教、時代や社会背景、経済活動などの条件が層状に重なり、時を得て凝集し、浮上したような文化とも言えそうだ。

文化の源流はヨーロッパの人々の動物との深い関係にある。アルタミラやラスコーなどの動物の壁画は実に象徴的にそれを教えているように思える。やがて陸続きの東方から遊牧文化と農耕文化が伝わり、家畜の飼育は森林開拓で得た農地を肥やししながらケルト文化を発展させた。動物飼育は動物の取扱い技術と知識を大いに高めたはずだ。ケルト人は日本のアイヌの動物観

と似たアニミズム的な精神性をもっていたようで面白い。森の動物クマは崇拜され、権力者はクマの飼育場、メナジェリーを持っていたようだが、原始的な動物園とも言える。ちなみに今のパリ動物園の呼称はメナジェリーだ。

時代が中世に変わると、キリスト教がヨーロッパに広がり社会は変化する。ケルト文化と違い森の動物を悪魔的にとらえ、人と動物を明確に区分し、コレクションの対象にもした。象徴的な例にデカルトの「動物機械論」がある。人のように心を持たぬ動物をモノ的に捉えた。皮肉にもこうした思想は動物の科学的分析を進め、動物学や解剖学等の発展につながった。

時代がさらに進むと、ヨーロッパは大航海時代に入る。キリスト教の布教、交易での経済活動、植民地支配などが同時に進み、社会は急激に変化した。皇帝や国王は神への忠誠心として神の創造物である様々な産物のコレクションを積極的に進め蓄財もした。動物も対象であり、各地の自然史博物館に収められた膨大なコレクション、標本を見ると当時の力の絶大さがわかる。生きた動物の輸送技術も高まると珍獣の収集も進み、動物学や分類学への認識はさらに高まり、動物収集に大いに寄与したに違いない。

ウィーンのハプスブルグ家・シェーンブルン宮殿にはマリア・テレサが動物を愛でる施設が作られ、それが現在のシェーンブルン動物園になった。ブルボン王朝ベルサイユ宮殿に集められた動物はフランス革命時のマリー・アントワネット処刑の翌年にパリに移され、現在のパリ植物園内のメナジェリー(パリ動物園)になっている。

大英帝国の力は特筆すべきだ。覇権的な植民地支配を背景に膨大なコレクション収集が行われ大英博物館を構成している。動物収集の目的

に動物学発展という新たな意識が芽生え、学術団体であるロンドン動物学協会が創立された。フランス革命の影響か、一般公開も行われ近代動物園の始まりとも言われる。設立にはイギリス植民地行政官でシンガポールの創設者トーマス・ラッフルズが関わっている。ロンドンの協会事務所を訪れたことがあるが、ラッフルズ像を発見し、協会設立の背景に経済界の存在を感じさせた。後に世界を動かすダーウィンの進化論はこうした空気感の中から誕生したのだろう。

動物園文化は、ずっと基底にあった人と動物との深い関係、動物への強い関心の上に、様々な文化が時を超え層状に重なり凝集し誕生したものだ。時代と社会の変化に生まれたコレクションと博物文化、動物は常に重要な位置にいた。だから動物は権威の象徴にも使われたのだろう。やがて動物資源の減少に気づき、動物を通じた自然理解と動物保全の必要性を知り、それが動物園を成熟させてきた。動物園はヨーロッパ人の動物や自然との濃厚な関わりの歴史から誕生し、変化してきた文化と言える。

今、世界の動物園界が掲げる活動目標は希少動物種の保存と環境教育であり、日本の動物園界も歩調を合わせている。しかし、目の前で動物を見る動物園利用者にはどこか実感がわきにくく、両者の間には溝があるように感じる。

日本に動物園文化が入り約140年、そろそろ日本人が抱く自然観や動物観を組み合わせた日本流の動物園文化が形にならないものだろうか。日本人は人と動物をどこか同格にとらえる感覚を持つ。同じ命を持つ動物を知り、愛情を向けることは相手を守るという保護保全の意識に似る。人も動物も安らげる空間づくりは、利用者にも分かりやすい保全活動なのかもしれない。